

「教育令」期における宮城県の裁縫教育の定着過程

高 野 俊

はじめに——課題と意図——

本論は、宮城県における「学制」期の女子教育と裁縫科の展開に関する実態調査の分析、及びその教育史的位置づけ¹⁾を踏まえて、これに続く「教育令」期において発展した裁縫教育の定着過程の一端を桃生郡の事例に着目して考察するものである。

初等普通教育において、「裁縫科」が学科目として制度化されたのは、明治12（1879）年9月29日公布の「教育令」においてである。その第三条に「小学校ハ普通ノ教育ヲ児童ニ授クル所ニシテ、其学科ヲ読書習字算術地理歴史修身等ノ初歩トス、土地ノ情况ニ随ヒテ野画唱歌体操等ヲ加ヘ、又物理生理博物等ノ大意ヲ加フ、殊ニ女子ノ為ニハ裁縫等ノ科ヲ設クヘシ」²⁾と規定された。さらに第四十二条には「凡学校ニ於テハ男女教場ヲ同クスルコトヲ得ス、但小学校ニ於テハ男女教場ヲ同クスルモ妨ケナシ」³⁾として男女別学の原則をも定めている。この教育令で示された女子の裁縫必修と男女別学の原則は、翌明治13（1880）年12月28日に公布された第二次教育令（改正教育令）にも、そのまま引き継がれた。また元田永孚が起草した「教学大旨」に端を発した、徳育重視の教育政策への転換によって修身を筆頭科目に位置づけるなど、女子教育にも儒教に基づく婦徳の涵養が求められるようになり、「裁縫」は特にその役割を担う教科として期待された。

裁縫教育の内容をより具体的に規定したのが翌14（1881）年5月4日制定の「小学校教則綱領」である。同綱領では、小学校を初等（3年）、中等（3年）、高等（2年）の三等に分け、初等科は「修身、読書、習字、算術ノ初歩及唱歌、体操トス、但唱歌ハ教授法等ノ整フヲ待テ之ヲ設クヘシ」（第二条）⁴⁾とされた。中等科は初等科教科目に加えて「地理、歴史、図画、博物、物理ノ初歩ヲ加ヘ殊ニ女子ノ為ニハ裁縫等ヲ設クルモノトス」（第三条）⁵⁾と規定した。高等科は中等科の教科目に加えて「化学、生理、幾何、経済ノ初歩ヲ加ヘ殊ニ女子ノ為ニハ経済等ニ換ヘ家事経済ノ大意ヲ加フルモノトス」（第四条）⁶⁾と規定した。この裁縫

と家事経済の教授内容は、第二十三条に「裁縫ハ中等科ヨリ高等科ニ通シテ之ヲ課シ、運針法ヨリ始メ漸次通常ノ衣服ノ裁方、縫方ヲ授クヘク、家事経済ハ高等科ニ至テ之ヲ課シ、衣服、洗濯、住居、什器、食物、割烹、理髪、出納等一家ノ経済ニ関スル事項ヲ授クヘシ、凡裁縫、家事経済ヲ授クルニハ民間日用ニ応センコトヲ要ス」⁷⁾と示されている。

かくして、裁縫は小学校の中等・高等科を通して課され、家事経済は高等科で授けることとなった。この時より裁縫は法規上はじめて正科として明確に規定され、明治・大正・昭和に至るなかで女子教育の主要教科として位置づけられたのである。

それでは、このような動向は「学制」期において文部当局と各地方当局双方の努力によって展開された女児小学振興にみる女子教育政策と、どう繋がる（あるいは繋がらない）のだろうか。そこには明確な教育思想と教育政策の意図的な転換があるのだろうか。

前述のように、男女別学の思想が「教育令」に規定された裁縫教育に明確にみられるのであり、そこでは男女平等（共通）教育を基本としつつも、女子の就学率を高めるために特に裁縫教育を重視・導入した「学制」期のそれとは明らかに異なるものがあるといえる。それは開明的・進歩的とも言える「学制」期の女子教育に対する捉え方と奨励策が、結局のところ、明治維新直後の現実の厚い壁に阻まれ、長期にわたる封建時代に培われてきた儒教的な女子教育観、男女の天分と役割の相違、今でいう性別役割分担論に基づく女子教育観に切り替えられ、そこから明確に男女別学思想に基づく裁縫教育論が改めて登場してきたといえる。

法規上、前記のように定められた裁縫科は、女児小学設立と普及の経験をもつ各府県においてどのように受けとめられ、各小学校での実施状況はどのようなものであったのだろうか。学制期における女児小学と、この教育令期における裁縫教育の繋がりを意識した実証的先行研究は、管見の限りでは見当たらない。

学制期において全国各府県に設置された女児小学は、明治11（1878）から、12年頃になると男女共通教育に基づく振興策では如何ともしがたい問題点を露呈し始め、各府県ごとに独自の女児小学教則や規則が定められ、尋常小学校に「裁縫科」が加設・増設されていく実態があった。筆者がこれまで詳細に調査・分析した千葉県・石川県・宮城県でも「教育令」の先取りかと思われる各郡単位や学校独自の裁縫教育の展開事例も数多くみられるのである⁸⁾。

本論では、学制期の明治9（1876）年当時から仙台市を中心に裁縫教育を積極的に推進し、郡部の各地に至るまで広範に展開された宮城県に着目し、学制期を土台としながら教育令期の明治13年～14年にかけて、郡単位で新しい公立小学教則と裁縫科教則を定め普及・徹底しようとした桃生郡の事例を取り上げて、裁縫教育の定着過程を明らかにしたい。

1 学制期から教育令期における宮城県の裁縫教育の特徴

学制期において宮城県が女子の就学促進と女子教育の振興を企図して取った具体的施策は、独立した女学校や女児学校の創設ではなく、男女共学小学校への「裁縫科」導入であった。これは、明治9（1876）年4月に開催された第七大学区教育議会で明示された「女子教育の方針」に対応した措置であったが、「議会」直後の6月、仙台の培根小学校訓導であり民権運動家でもあった若生精一郎によって具体的に開始されたのがその嚆矢である。同校独自の「裁縫科教則」は、科目を六級に分け、毎級を5ヶ月、正課後の1～2時間の習業として、運針から始まって袴・帯等の縫い方まで段階的に習得できるように工夫されたものであった。この裁縫専科では、家庭が貧困で子守りなどの家事労働に従事しなければならない不就学女児のためにも来学を許し、無月謝で裁縫のほか「修身、育児、養生、珠算および帳合法、日用文」などの日常生活に必要な知識や事柄を教えようとした事実は極めて注目されるのである⁹⁾。

その2ヶ月後には、朴澤三代治が関与した仙台の琢玉小学校でも裁縫教育が実施され、この両校の実践が示範かつ契機となって、各郡部の小学校でも相次いで独自の教則を定めるなど、裁縫科が増設されていく。こうした中で、県当局は明治10（1877）年7月には、朴澤の実践を基にした「裁縫科仮教則」を布達する。この教則は①正課女生徒満10歳以上の者、②科目を八級に分け毎級6か月の修業、4年で卒業、③毎級の終りに試験を経て昇級、④修業は1日2時間、午後2時30分～4時30分、⑤科目は第八級（素縫、直線縫）、第七級（単物、木綿小児帯）、第六級（木綿袴、木綿絮入）、第五級（洗張、補綴）、第四級（木綿羽織、夜具、袴）、第三級（絹紬羽織、男女帯、小物）、第二級（木綿袴、絹紬絮入、帷子）、第一級（巻物袴、巻物絮入、巻物男女帯）であり、裁縫の基本から応用へと段階的に習得でき、羽織・絮入・帯までを含む高度な技術をも身につけられるように配慮されているものである¹⁰⁾。

宮城県の特色は、上記の「教則」に準拠して朴澤が直接指導に当たった仙台市部だけに止まらず、都市部・農漁村部までわたる県下の各小学校で広範に裁縫教育への着手と展開がみられたことである。また、学事奨励や就学奨励の一手段として実施された裁縫科の公開大試験は、仙台の培根・琢玉小学校を中心に大々的に行われ、県内はもとより近隣の山形・岩手・福島をはじめ遠方諸県にまで評判を呼び、各地でその任にあたる裁縫教員たちの示範となり研修・講習の絶好の機会になったといえる。

以上、学制期の小学校における裁縫教育の特徴を述べてきたが、それでは、「教育令」および「改正教育令」が發布されるに及んで、宮城県ではこれにどのように対応し、その中で

裁縫科の規定や取り扱いはどのように変わったのだろうか。

宮城県では、この「教育令」公布前後において、次のような一連の教育施策が行われた。明治12(1879)年3月、最初の宮城県会が開催され、民意を県令の行政に反映させる制度が発足し、ここではさまざまな問題が取り上げられたが、教育もまた重要な県政の問題として活発な議論が交わされることになった¹¹⁾。

その結果として、まずは従来の小学教則を廃止して、同年8月4日(県達甲第一四四号)をもって「宮城県小学教則」(「小学教則正科」・「小学教則略科」)を制定し、教則の簡略化(読書・問答・書取・算術・習字・体操の6教科編成)を進め、その内容を「日常必要ノ事物」に限るとした。さらに修学期間を3か年(正科)か2か年(略科)とし、「学制」の上下等各4か年、計8か年の就学年限の大幅な短縮化を図っている。さらに裁縫教育についても正科・略科とも「女子ノ為ニ適宜裁縫ノ一科ヲ設ケ、課業時間外ニ指導」と規定された¹²⁾。

また、次いで、「宮城県学規」(明治12年9月8日付)を定め、学区制・学区取締制を廃止して公選による学区委員制を採用することになった。12年9月29日に、「教育令」が發布された後には、これに対応して「宮城県学規改廃制定ニ関スル布達」(明治13年1月27日付)¹³⁾、「宮城県教育会規則布達」(明治13年2月18日)¹⁴⁾、「宮城県小学校則模本達」(明治13年3月16日付)¹⁵⁾が相次いで出される。この「模本」は、教育令の主旨通りに、県内各「該地ノ景況ヲ斟酌」して新しい教則を編成する際の“模範”を示したものである。

この凡例に規定された裁縫科は、「正科」では「女子ノ為ニ第三級前期ヨリ適宜裁縫ノ一科ヲ設クヘシ、但シ裁縫ハ課業時間外トス」¹⁶⁾であり、「略科」では、「地方ノ情況ニヨリ二級以上女子ノ為メニ適宜裁縫ノ一科ヲ設クヘシ、但シ裁縫ハ課業時間外トス」¹⁷⁾と定められた。いずれも「課業時間外トス」とあるのが注目される。この規定に即応して、明治13年4月9日には県内小学校における裁縫教則の手本となるべき「宮城師範附属小学裁縫教則」¹⁸⁾が、当時、女子師範の教員であった朴澤三代治によって創定され¹⁹⁾、学校長の和久正辰から宮城県令松平正直へ以下の「伺書」が上申されている。

「宮城県師範学校附属小学校裁縫教則」

小学裁縫正科教則

一此教則ハ裁縫ノ大成ヲ主トスルモノニシテ、学期長ク十分ノ課程ヲ経テ完全ノ科目ヲ脩メント欲スル者ノ為ニ設クルモノナリ

一女子ニシテ此科ニ入ラント欲スル者ハ、本科ノ等級ニ拘ラズ十年以上タルベシ

一科程ヲ分テ八級トナシ、毎級六ヶ月間ノ修業ト定メ、四年ニシテ卒業セシム

一毎級ノ終リ試験ヲ行ヒ、及第ノ者ヘハ昇級証書ヲ授与スベシ

一修業ハ本科時間ノ外二時間トス

課程

第八級	素縫 直線縫	第七級	単物 小児帯	第六級	木綿裕 洗張
第五級	木綿絮入 補綴	第四級	木綿羽織 夜具 袴		
第三級	絹紬羽織 男女帯 小物	第二級	絹紬裕 絹紬絮入 帷子		
第一級	巻物類裕 巻物類絮入 巻物類男女帯				

小学校裁縫略科教則

一此教則ハ裁縫正科ノ要領ヲ撮取シタルモノニシテ、世ノ家業ニ妨ケラレ充分ニ該科ヲ習学スルコト能ハサル者ノ為ニ設クルモノナリ、故ニ学期短クシテ能ク普通ノ裁縫科ヲ速成セシムルヲ以テ目的トス

一凡ソ女子ニシテ此科入ラント欲スル者ハ、本科ノ等級ニ拘ラズ満十年以上タルベシ

一課程ヲ分テ五級トシ、毎月六ヶ月間ノ修業ト定メ、二年半ニシテ卒業セシムルモノトス

一毎級ノ終リ試験ヲ行ヒ、及第ノ者ヘハ昇級証書ヲ授与スベシ

一修業ハ本科時間ノ外二時間トス

課程

第五級	素縫 直線縫 小児帯 単物	第四級	木綿裕 洗張 補縫 木綿絮入
第三級	夜具 袴 小物縫	第二級	絹紬羽織 男女帯 絹紬裕
第一級	帷子 巻物類裕 巻物類絮入 巻物類男女帯		

上記のごとく、正科・略科とも裁縫科への入学女生徒は十歳以上、一日の修業は本科時間外の二時間である。修業年限は正科が四年、略科は二年半であり、略科の課程は第五級～第一級までとして短縮してある。この裁縫内容は、「学制」期の明治10（1877）年6月に制定された県達の「裁縫科仮教則」と全く同一であることが注目される。

このような動向のなかで、明治13（1880）年前後から14年にかけて、県下各地の連合小学校から教則認可を求める照会が盛んに行われたことが、「学事関係文書中」の「小学教則綴」（明治13年～14年）²⁰⁾によって知ることができる。これは、県当局が明治13年に示した「教則」が「模本」とされていたこと、したがって県下各地の小学校では地域の実情に即して編成する必要に迫られ、郡内小学校の教員や担当行政者たちが連合・協力して作成し提出したものである。それら、各地区単位で制定した「小学校教則」に裁縫科はどのように規程

されているのか、筆者がこれまで確認できたのは次のようなものである。

・仙台区公立小学校教則

一、女子ノ為メニ該科ヲ設ケ滿十年以上ノ者ヲシテ就業セシム、但予科裁縫科共ニ課業時間外トス

・宮城郡公立小学校教則

一、地方ノ情況ニヨリ女子ノ為ニ裁縫ノ一課ヲ設クヘシ、但シ裁縫ハ課業時間外トス

・名取郡公立小学教則略科

一、女子ノ為メニ第三級以上ニ適宜裁縫ノ一科ヲ設ク、授業時間ハ本科授業時間外ニ於テス

・黒川郡・加美郡小学教則

一、地方ノ情況ニヨリ女子ノ為ニ適宜裁縫ノ一科ヲ設クベシ、但シ裁縫ハ課業時間外トス

・登米郡公立小学校教則

一、女子ノ為メニ適宜裁縫ノ一科ヲ設クベシ、但裁縫ハ課業外壱時間教授セシム

・桃生郡公立小学教則（附録裁縫科）

一、裁縫ノ修業時間ハ各校適宜タルヘシト雖、可及的本課時間外ニ授クルヲ法トス

・牡鹿郡公立小学教則

一、校舎教場男女ノ區別、各校ノ都合ニヨリ可成的該區別ヲナス

一、女子ノ為メニ裁縫ノ一科ヲ置キ、授業時間ハ一時間トス

上記の仙台区および各郡の小学校教則のなかで着目したいのが、詳細な裁縫科教則を定めた桃生郡である。ここで展開された裁縫教育の施策と取り組みは、どのようなものであったのだろうか。

2 桃生郡の裁縫科教則と裁縫科試験法

桃生郡は宮城県の東北部に位置していて、東は太平洋に臨み、東南は牡鹿郡に接する高原性の山地であり、西側は遠田郡および宮城郡に連なる低湿な平野地帯である。一方の北側は本吉・登米の二郡に界し、北上川の北より来って東南に分流、郡中を三分して、その西を深谷、北を桃生北方、南を桃生南方と称している。明治13年当時は、飯野川町をはじめとして桃生村、鹿又村、小野村、野蒜村等、一町一八カ村の純農村地域である²¹⁾。

桃生郡は、学制期に展開された裁縫教育のなかで極めて注目される地域であり、その実態については、拙著『明治初期女児小学の研究—近代日本における女子教育の源流—』の第7章において詳述した²²⁾。同郡の裁縫教育の施策と勸奨は明治10年7月、深谷地区が独自に構想した「縫織科仮教則」が始まりである。これは「学制」26章の女児小学規程や、第七大学

区の教育議会で決議された「女子教育の方針」を地方行政官たちが忠実に受けとめ、郡単位でその施策の具体化に積極的に関与した県内最初の事例である。

この「縫織科」設立の趣旨は、郡内の各小学校に模範となるべき新築の「女教場」を設け、裁縫教育を導入することによって学齢女児の就学を促進させようとするものであった。それゆえ、この「教則」では、就学年齢を9歳とし、年長の不就学女子に対しては年齢不問で随時入学できるように配慮した。その裁縫教育内容は、県達の「裁縫科教則」と大きく異なり、基礎から応用へと順序を踏んで習得していく課程になっていないこと、紡績、機織、器械縫いなどの高度な技術を習得させようと構想していたことなど、小学校での裁縫教育の範囲を超え、むしろ授産的役割をもつ「女紅場」を企図したものであった。これを管内すべての小学校に推し広めようとした方針そのものに無理があり、郡内で裁縫科を設置したのは、広瀬小学校、小野小学校、鹿又小学校の三校のみである。この「女教場」の具体的実施校と期待された広瀬小学校では、裁縫教員の人選と採用の困難さ、裁縫場設置の財源（有志金）不足などによって、裁縫教育の実際は裁縫のごく初歩的技術の習得と簡単な日常着の製作に限られたと推測される。その実態について「広瀬小学校沿革誌」に次のように記録されている。

「九月一日 本校内ニ修身講堂ヲ開設シ、毎日生徒退散ノ時ニ臨ミ懇口ニ修身談ヲナシ、以テ勉メテ生徒ノ風儀ヲ矯正センコトヲ圖リ、又裁縫科ヲ設ケ、宮城縣士族吉田ヤスヲ以テ該教授手傳ヲ托シ、専修生及ヒ豫科生ヲ併セ教フ、専修生ハ小学科ヲ修メス専ラ該科ヲ修ムル者、豫科生ハ小学科修業ノ餘暇ヲ以テ該科ヲ修ムル者ニシテ、年齢概ネ十歳以上ノ女児ヲシテ之ヲ學ハシム、共ニ人員拾餘名ニシテ、而シテ該科ニ要スル俸給及ヒ諸費ノ如キ、亦皆學田ノ収得ヲ以テ之ヲ支辨シタリト云フ」

このように開始された裁縫科であったが、翌年には「裁縫科ヲ廢ス」ことになり短期間で終わっている。この理由は、これまで学校世話係が管理・支弁してきた「學田」の収益金が、県の方針によって郡役所の管理に移ることとなり、特設してきた裁縫科の運営資金に充てることができなくなったと記録されている²³⁾。

桃生郡では、明治13年8月、「教育令」および「改正教育令」による「宮城県小学校教則模本達」に即応して、郡内39小学校の連合による改正「公立小学教則」を制定した。同時に、制度化された「裁縫科」について、郡内管下小学校の模範となる「小学教則附録裁縫科」が規定される²⁴⁾。

学科課程は〈表一〉のとおりであるが、この裁縫内容は明治10年7月の県達「裁縫科仮教則」に依拠したものである。学期は、全科授業を3年、一級を6ヶ月とし、授業日数は258日、授業時限は一日2時間で一週12時間としている。入学生徒の年齢は、満十年より満十四

年までとし、試業は月次試験、臨時試験、定期試験、大試験の四種としている。教則凡例は次のように記載されている。

一科目ヲ分チテ六級トシ、毎級ノ修業ヲ六ヶ月ト定メ、三年ニシテ全ク卒業スルモノトス
一毎級必ス試験ヲ施シ、格ニ合ウ者ハ卒業證書ヲ授與シ、格ニ合ハサル者ハ元級ニ止ムルヲ法トス

一修業時間ハ各校適宜タルヘシト雖、可及的本課時間外ニ授クルヲ法トス

さらに、続いて同年の8月に規定されたのが「桃生郡公立小学校の裁縫科試験法」である²⁵⁾。試験法・評価方法・試験教場規則までを詳細に定めたもので、極めて注目される規程であるので以下に列挙しておく。

裁縫科試験法

第一條 試験法ヲ分チテ月次試験、臨時試験、定期試験、大試験ノ四種トス

第二條 月次試験ハ、毎月末、生徒其月学習セシ科業ヲ試ミ、級中ノ坐次ヲ進退トスルモノトス

第三條 臨時試験ハ、學業ノ進否ニヨリ、一學期ノ内外ニ於テ之ヲ施行スルモノトス

第四條 定期試験ハ、一學期中修學セシ所ヲ試ムルモノトス

第五條 大試験ハ、全科ヲ卒業スル時ニ之ヲ行フモノトス

第六條 試験ノ評点ハ、巧拙遅速ノ二種ニ區別ス

第一巧拙点ハ、最巧無失ヲ百点トシ、以下其ノ優劣ニヨリテ通次十点ヲ減ス

第二遅速点ハ、最速拔群ヲ百点トシ、以下其緩急ニヨリテ通次十点ヲ減ス

第七條 月次、臨時、定期、大試験点数計算ノ法、下記ノ如シ（小學裁縫試験表は、〈表一2〉のとおりである。）

第八條 評点（一學科ノ巧拙或ハ遅速点）及ヒ平均点（各評点ヲ通算シ毎科巧拙遅速ヲ以テ除シタル者）ハ総テ一百点ヲ以テ最上トス

第九條 及第スヘキ生徒ハ、其當日得ル所ノ平均点、六十以上ヲ得ル所ニ非サレハ卒業證書ヲ與ヘス、但シ、試験スヘキ問題ハ各校適宜ニ之ヲ製定スルモノトス

〔表一〕 桃生郡公立小学校学科課程表附録裁縫科

裁 方								學 科	
十 二 時								時	級
				袖 廻	直 線	素 縫	名衣 称服		第六級
六 時								時	級
		小 供 帶	單 衣	大 首 付 衣	同 上	同 上		綿 入	第五級
六 時								時	級
		綿 入	裕	大 首 付 綿 入	同 上	同 上		羽 織	第四級
六 時								時	級
		女 帶	羽 織	頭 巾	同 上	同 一		股 引	第三級
六 時								時	級
袴	單 絹 衣 紬	男 帶	脚 半	衫 子	絹 直 線	絹 素 縫		單 絹 衣 紬	第二級
六 時								時	級
			卷 物 類 帶	綿 絹 紬 入 裕	同 上	同 上		綿 絹 紬 入 裕	第一級

〔小学教則綴〕学務課（明治十三年～十四年）

〔表二〕 小学裁縫科試験表

2	1		科目 坐次
80	100	巧拙	何科
90	90	遅速	
80	80	巧拙	何科
70	100	遅速	
80	80	巧拙	何科
80	90	遅速	
450	540	総点	
80	90	平均点	
何ノ誰	何ノ誰	姓名	

〔小学教則綴認可〕学務課（明治十三年）

教場規則

- 第一條 生徒教場ニアリテハ、萬事教員ノ指示ニ従フヘシ
- 第二條 就課及ヒ放課ハ、擊柝或ハ撞鐘ヲ以テ之ヲ報ス
- 第三條 昇降ニ順列ヲ正クシ、着席ニ次序ヲ守ルヘシ
- 第四條 受業中ハ、殊ニ容儀ヲ肅ミ禮節ヲ修ムヘシ
- 第五條 課業中、漫ニ意見ヲ發ス可カラス
- 第六條 課業中、縦ニ席ヲ離ルヘカラス
- 第七條 無用ノ雜談謔嘘ヲ為スヘカラス
- 第八條 教員ノ許可ヲ得スシテ、教場装置ノ書器ヲ使用スヘカラス
- 第九條 課業時間ノ外、縦ニ教場ニ入ルヘカラス
- 第十條 教場ニアリテ、帽襟卷及ヒ外套等ヲ着用スヘカラス

以上、県庁学事文書の「願伺届綴」・「小学校教則綴」(明治13年~14年)によって裁縫科の規程をみてきたが、一方、当時の宮城地方新聞にも県内各地の小学校で裁縫教育に着手した実情を窺える記事が散見される。その一例を挙げてみると以下のようなものである。

- ・「黒川郡糟川村の小学校は去明治7年の設立に係ると雖とも、(中略) 広大なる一棟を新築し、二階を裁縫場に階下を小学教場となす、(中略) 裁縫科助教長江しん子は女生徒61名を率ゐいて式場に臨み、(中略) 優等の女生徒には縫糸十繰づつ贈られる」

(「陸羽日日新聞」明治13年9月17日 第996号)

- ・「……伊具郡の金山本郷は山間の小村なるか、夫れには不^そ似合にて頗る人心の振起結合のよろしき所にて、(中略) 小学校生徒の如きも戸数に比すれば余程大勢にて、日毎の出席殆と二百名、内、裁縫生徒四十余名にして、其技芸の練熟せる未だ郡中に見ざる所なるは、訓導高野彪氏夫婦の教授の親切なるによるへし」

(「宮城日報」明治13年10月1日)

- ・「伊具郡丸森小学校は市街を距ること一町ばかりにありて、日々通学の生徒三百余名、校内に裁縫科を設け生徒九十余名あり……」

(「宮城日報」明治13年10月14日)

- ・「黒川郡吉岡小学校にては是まで裁縫科の設けなかりしに、今度當区より條川はる子を雇入れ去る十九日開業式を執行されしが……」

(「陸羽日日新聞」明治13年11月23日 1076号)

- ・「宮城郡根白石町小学校教員、太田景敬が妻のお徳(三十八)も、同じく同校裁縫科の教師を頼まれ居るに、是れまた能く行き届くものから町内中太田を有難かり……」

(「陸羽日日新聞」明治13年12月14日 第1068号)

こうした県当局による一連の積極的な施策や各郡の小学校教員および教育行政関係者の努力があって、明治11年に35.5%であった就学率が、明治13年には42.7%に上昇するなど「教育令」公布前後、本県の教育は順調な普及・発展をなしたといえる。これには裁縫科の積極的な推進・展開が大きな要因の一つとなったといえよう²⁶⁾。

3 「宮城県学事条例」および「宮城県小学教則」の制定と裁縫科規程

「改正教育令」（明治13年12月28日）および「小学校教則綱領」（明治14年5月4日）に続く諸布達・訓令の趣旨を受けて、明治15（1882）年3月に「宮城県学事条例」（県達甲第30号）・「宮城県小学教則」が制定された。これは、これまで12年の「教育令」の部分的修正に止まる施策しか行ってこなかった宮城県が、早急に「改正教育令」体制の確立を求められ、それを実施する方針を県当局が明らかにした最初のものである。この「条例」は全11章85条から成り、宮城県当局がそれまでに示した諸法規の中では最も体系的で詳細なものである²⁷⁾。「条例」中の裁縫科規程は第8条にあり、「裁縫家事経済等ノ学科ニ関シテハ、特ニ之ヲ教授スルモノヲ置キ」、「裁縫家事経済等ノ各科ハ、実施之ヲ演セシムルモノトス」²⁸⁾。また、「教則」には第3条、第4条に裁縫科規程があるが、これは「小学校教則綱領」（明治14年5月4日付）の条文と完全に一致したものである。ただし、裁縫試験については「其運針整ヒ技芸優レル者ヲ満点トシ、以下習字ニ準スヘシ」と規定してある²⁹⁾。

その後、宮城県の裁縫教育は、朴澤三代治が指導する宮城県師範学校附属小学校や、仙台市中の木町通小学校³⁰⁾をはじめとする東二番丁小学校・東六番丁小学校・南材木町小学校、下記丁小学校などの公立小学校³¹⁾、および各郡部の小学校³²⁾へと広範に広がり、「教育令」期を通して明治19年以降の「小学校令」期まで引き継がれ発展していった。また一方、朴沢が明治12年に開設した「松操私塾」をはじめとして、下記に列挙した私立裁縫塾や女紅場が開設され隆盛を極めた。このなかには裁縫教員として自活し長期に及んで活躍した志賀知子、祇園寺きく、熊谷霜代、涌谷つるなど松操私塾門下生の活躍が目される。

4 宮城県における私立裁縫塾・女紅場の開設状況（明治12年～明治20年）³³⁾

明治12（1879）． 1	朴澤三代治（57歳）、「松操私塾」開業願を県に提出、同年29日に許可される。4日後の1月31日に開業、明治17年に「私立松操学校」と改称。
明治12（1879）． 1	梅津教知、仙台区東三番丁の自邸内に「私立仙台女紅場」を開設。明治12年1月頃の生徒数は178名。

- 明治13 (1880). 志賀知子 (松操私塾門下生)、仙台大町に「彫管裁縫塾」を開設。傍ら、明治13年から17年まで師範学校の裁縫教師を勤む。明治21、22年頃の生徒数は100余名。彫管女学校は明治35、36年頃まで経営。志賀は明治11年1月に、宮城県上谷刈小学校裁縫科を自費により開設した経験をもつ。
- 明治14 (1881). 8 祇園寺きく (松操私塾門下生)、古川に「祇園寺裁縫私塾」を開設。明治21年4月に「祇園寺裁縫塾」を再興する。明治29年11月20日に「私立祇園寺裁縫学校」として再出発。
- 明治16 (1883). 3 梅津貞範「仙台女紅場」を開設。
- 明治17 (1884). 11 佐藤則成、仙台北目町通に「専修学舎」を開設、学齡外の男女に裁縫科を教授。
- 明治18 (1885). 8 熊谷霜代 (松操私塾門下生) 栗原郡若柳村駅に「含翠私塾」を開設。
- 明治19 (1886). 真田マホキ、牡鹿郡石巻村に「守拙裁縫学校」を設立。
- 明治20 (1887). 9 涌谷 (中川) つる (松操私塾門下生)、仙台南町に「身章私塾」を開設、のちに女学校の許可を得る。つるは明治11年に松操私塾に入り、養賢 (片平丁) 小学校の助教を勤めたのち、明治19年設立の宮城女学校 (ミッション系) で裁縫教員の嘱託になったあと、身章私塾を開いた。
- 明治20 (1887). 11 長谷理和、「私立柳絮学校」を開設。長谷は明治3年7月から仙台の北一番丁に「長谷裁縫塾」を開設。明治11年頃には、仙台の木町通小学校の裁縫教師を勤める。

朴澤は、明治13年、58歳で『裁縫教授掛図』を出版したのをはじめ、明治25年の70歳まで下記のような裁縫教科書および掛図を世に出している。これらの出版物は裁縫教育の指針・指導書となり、宮城県はもとより全国各地へ広範に普及して、裁縫教育の推進・発展に大いなる貢献をなした。

5 朴澤三代治が執筆した裁縫教科書・掛図 (明治13年～明治25年)³⁴⁾

- 明治13 (1880). 58歳、『裁縫教授掛図』、伊勢安右衛門出版、模型によって一斉に教授する新しい方法を具体化したもの。
- 明治15 (1882). 1 60歳、『衣服名称掛図』(6軸)、伊勢安右衛門出版、出版の2年後にはニューヨークで開催された教育博物館に出品された。
- 明治15 (1882). 4 60歳、『裁縫用具懸図』(6軸)、伊勢安右衛門出版

明治15 (1882). 10	60歳、『小学始教』全（木村敏編輯）、伊勢安右衛門出版、『衣服名称掛図』と同様の衣服・襦高前後・暗射の名称図が6図採録されてある。
明治17 (1884). 7	62歳、『新撰小学初步』全（佐藤編輯・出版）、『小学始教』と同様の6図が採録されてある。
明治17 (1884). 9	62歳、『小学中等科裁縫教授書』（卷之一）、大内源太右衛門出版、高橋藤七発兌。いまだ不十分な裁縫技術を広く一般に知らせることが目的で編まれたもの。（模型等から実物へ）。明治19年に師範学校用教科書として文部省から指定された。
明治17 (1884).	62歳、『小学中等科裁縫教授書』（卷之二）
明治17 (1884).	62歳、『小学高等科裁縫教授書』
明治19 (1886).	64歳、『新撰小学始教』全、（川村武之助編輯・出版）
明治25 (1892).	70歳、『裁縫餘言』全、朴澤三代治述、朴澤良助発行、生徒に対し智・徳・体育上婦女子の心得べきことを講話したものの中から二節を収録したもの。

まとめに代えて——朴澤三代治の存在と役割——

以上、述べてきたように、宮城県の「教育令」期における裁縫教育の定着過程は、「学制」期において既にその土台（基盤）が形成され、明治12年9月の教育令、翌13年の改正教育令の発布後も、その学習内容を大幅に変えることなく継続的に伝達・教授された。その在り方は、正課の男女共通教育を受けた女生徒が、放課後（課外）に2時間程度の「裁縫」を習得するものであった。一方、諸々の事情による未就学女兒や就学対象外の年長者のために略科および専科の裁縫科も特設され、そこには年齢を問わず随時入学できるという措置がとられていた。その施策と対応は、明治5年の「学制」に基づく男女共通教育と女兒小学における裁縫科導入の奨励に適ったものであり、女子の就学率を高める役割を果たすことになったと同時に、それは当時の親や地域住民の要求と期待に添うものであり、なおかつ裁縫技術を身につけたいという女兒たち自身の願いにも適う措置であった。それ故、文教行政を担った地方当局者も相当の努力をし、財政面でのバックアップ、教場の確保、担当しうる教員の養成と人撰等に全力を傾けたのであった。この理念、教育要求、実際の普及のための努力、この三つが相まって裁縫教育が普及・発展・定着していく路線が、宮城県という地方において根づいたものと捉えられる。この実態は、教育令期において裁縫教育が定着していった過程を示す典型的な事例であり、全国的にみてその先端となって各府県の模範・示範となる展開・

実践がなされたといつてよいであろう。

その裁縫教育を実践し、普及・発展させた原動力となったのが朴澤三代治である。彼が主に活動した仙台の女子師範学校、その附属小学校、仙台市中の琢玉(立町)小学校と培根(木町通)小学校を中心として、全国的に注目される裁縫教育が行われた。この活発で、しかも近代的教授法をもって活動できた背景には、学制期における裁縫教育開始期から教育活動の場を同じにした、近代的な開明思想をもった校長職の訓導や情熱と行動力のある青年教師達が存在した。さらに、旧士族仲間からの財政的なバックアップや直接的な協力も、裁縫教育の発展と定着の推進力となった。中でも若生精一郎を始めとする自由民権運動を進めた人たちの交流と協力、新しい教授法の開発などは大きな力となった。それはまた、若生たちが創設した開明的新聞社との関わりの深さによっても推察することができる。

また一方、朴澤が教え育てた女子師範学校の卒業生、松操私塾の門下生、小学校の裁縫専科で学んだ教え子たちが私塾を開設したり、裁縫教員として仙台市内の小学校や郡部各地の小学校で活躍したことも、さらなる普及・発展・定着をもたらしたといえよう。しかし、県内の郡部全ての村々の小学校にその条件が備わったわけではなく、本論で着目した桃生郡のような農村などの事例にみられるように、郡内の小学校に裁縫科を設置・展開しようと企図して、高度な裁縫技術や技能を修得できる形式的な「裁縫教則」は整えられたものの、実際の各小学校現場においては、いまだ適当な裁縫教員が確保できず到底実施不可能であったという限界もみられるのである。

以上述べてきたように、宮城県の裁縫教育は、「教育令」期において、親や民衆の教育要求に応えつつ依然として普及・発展の流れをたどり定着した。その後、裁縫のほかに容儀・礼法が加わることによって明確な男女別学となり、その傾向が明治15年から19年までの教育令期においてより具体化され、次に続く「小学校令」に継承されて、のちの日本の女子教育を特徴づける良妻賢母主義教育のなかに位置づけられるようになったのである。

註

- 1) 拙著『明治初期女児小学の研究—近代日本における女子教育の源流—』大月書店 平成14(2002)年3月 第6章～第10章 246頁～458頁
- 2) 『明治以降教育制度発達史』(第二巻)教育史編纂会編 昭和39(1964)年 162頁
- 3) 同上書 165頁
- 4)・5)・6) 同上書 252頁
- 7) 同上書 256頁

- 8) 前掲『明治初期女児小学の研究—近代日本における女子教育の源流—』
- 9) 前掲『明治初期女児小学の研究—近代日本における女子教育の源流—』および千葉昌弘「明治初期宮城県の女子教育と（初代）朴澤三代治」仙台大学紀要 昭和51（1976）年
- 10) 同上書および同上論文
- 11) 『宮城県教育百年史』（第一巻）明治編 宮城県教育委員会 昭和51（1976）年3月 161頁
- 12) 同上書
- 13)・14)・15) 同上書（第四巻）資料編
- 16)・17)・18) 同上書 304頁、307頁、314頁
- 19) 「仙台日日新聞」・「陸羽日日新聞」（明治12年1月～13年11月）の掲載記事によれば、宮城県師範学校附属小学校で裁縫科を開始したのは、「教育令」（明治12年9月）直後の同年11月である。明治13年当時の裁縫教員は宮城師範学校と兼務の朴澤三代治（月俸七圓）、裁縫教授手伝の眞柳さてふ子（月俸二圓）であった。また、「宮城日報」（明治13年7月23日付）には、7月の裁縫科定期試験で優等生として表彰された西山とよ（七級生）、菱沼いく（七級生）、小山はる（八級生）等31名の記事が載っている。
- 20) 「願伺届綴」学務課 明治13（1880）・14（1881）年
- 21) 前掲『明治女児小学の研究—近代日本における女子教育の源流—』 277頁
- 22) 同上書 276頁～298頁
- 23) 県庁学事文書の「願伺指令綴」明治10年に所収の「広瀨小学校内新ニ裁縫科取設候ニ付伺書」には、明治10年8月の設立とあり、前掲書『明治初期女児小学の研究—近代日本における女子教育の源流—』にもその詳細を記載したが（284頁）、明治10年6月に郡単位で制定された「深谷小学区縫織科設立願」との関係性から考えても、『沿革誌』に記載された9年1月の裁縫科設置は、明らかに記録違いである。今後再検討が必要である。
- 24) 「小学教則綴」学務課 明治13（1880）年・14（1881）年
- 25) 「小学教則認可綴」学務課 明治13（1880）年
- 26) 前掲『宮城県教育百年史』（第一巻）明治編 宮城県教育委員会 166頁、188頁
本論では、「教育令」期における裁縫教育の普及と発展状況を示す新聞記事を、明治13年に限って掲載したが、翌14年～18年当時の関係記事も多く見られ、その隆盛を知ることができる。
- 27) 同上書 166頁、188頁
- 28)・29) 同上書 370頁、382頁
- 30) 「裁縫科免状符合簿」（明治16年10月記録）公立木町通小学校には、明治16年～18年での小学中等裁縫科卒業生および裁縫専門高等科卒業生の名簿があり、本校における裁縫教育の隆盛状況を窺うことができる。
- 31) 「陸羽日日新聞」（明治14年5月～11月）、「奥羽日日新聞」（明治16年7月～11月）に、仙台市内

各小学校の裁縫科の試験で優秀な成績を修めた女生徒たちが紹介されている。

32) 「陸羽日日新聞」(明治14年12月～18年)には、遠田郡馬場谷地小学校裁縫科定期試験での技術優秀受賞者のこと、栗原郡築館小学校・志田郡古川小学校・本吉郡気仙沼小学校・宮城郡福岡小学校等の裁縫科隆盛状況が掲載されている。また、「教則校則関係綴」学務課(明治14年)には、遠田郡不動堂村小学校の裁縫科設立上申記録がみられる。

33) 「願伺届綴」学務課 明治15(1882)年、『宮城県教育の源流とその領域—百年史に輝く教師群像—』 宮城師範学校同窓会 昭和48(1973)年8月、『みやぎの女性史』 宮城県みやぎの女性史研究会 河北新報社 平成11(1999)年3月、中山栄子『宮城の女性』 金港堂 昭和63(1988)年、渡辺慎也氏作成表等参照。

34) 鈴木理郎『朴澤学園の女子教育111年の足跡』 平成8(1996)年9月22日、前掲『明治初期女児小学の研究—近代日本における女子教育の源流—』 270頁、271頁、渡辺慎也氏作成の「執筆出版書目等一覧」を参照。

〈追記〉

本論文は、教育史学会第46回大会(2002年10月5日、於、中央大学)で口頭発表をした内容を基に補筆・修正したものである。